

# 川崎市生田緑地におけるシジュウカラの繁殖期の テリトリーについて (1995年~1999年)

高橋 小百合\*<sup>1</sup>・野鳥班\*<sup>2</sup>

On Breeding Territory of the Japanese Great Tit (*Parus major*) in the Ikuta-Ryokuchi Park,  
Kawasaki City(1995~1999)

Sayuri Takahashi and Bird Reseacher Group

## I はじめに

シジュウカラ*Parus major*は留鳥として平地から山地の林に生息し、緑の多い住宅地でも普通に見られる身近な鳥である。生態的には、3月半ばまでにはそれまでの冬期の群を解消し、♂は繁殖場所を確保するために囀り、テリトリーをもつ。産卵・育雛を経て5~6月には巣立ちをした幼鳥が見られ、2回目の繁殖も7月頃には終わる。秋、成鳥を核とし若鳥を加えた冬期の群が出来上がるという1年を繰り返すといわれている。

川崎市青少年科学館では、シジュウカラの繁殖期のテリトリーについての記録を、川崎市自然環境調査報告(木下ほか 1994)で予報として報告している。今回は1995年から1999年までの5年間の調査結果を報告するものである。

調査にあたり、千羽晋示氏(国立科学博物館 名誉研究員)に調査方法の指導及び本稿の校閲をいただき、増淵和夫氏(川崎市青少年科学館)には面積の計算方法の助言をいただいた。厚くお礼を申し上げたい。

## II 調査地の概要

調査地は生田緑地内の南東部にある「野鳥の森」及びその南西部に隣接する「科学館奥の谷戸」で、合わせて南北約290m、東西約200m、面積約4.3ha、標高は約40~80mであり図1に示した。

「野鳥の森」は、北側に公園の駐車場があり東側は道路をはさみ住宅地向ヶ丘遊園へ続く緑地があるが、一部1997年3月から工事が行われ、現在そこには、新しい道路が建設されている。北に開口した南北に細長い凹地で幅約2.5mの林道がS字状に通り、野鳥の水浴、水飲み場となる湧水が数カ所ある。「科学館奥の谷戸」は青少年科学館南側の「県の木見本園」の奥にあり、数本の湧水が小さな谷戸を流れている。両地域は尾根筋の林道が隣接し、全体として勾配のきつい斜面が多い。調査地域内は一部植栽を含むものの、クヌギ・コナラを中心とした2次林の相関を比較的良好に保っている。高木では他にイヌシデ・シラカシや、ユリノキ・フウ(植栽)などが目立ち、林床にはアズマネザサ・アオキなどが繁茂している。工事では、その他1999年4月の調査の時、東

図1 調査地(枠内) ●は調査地点  
(川崎市発行 1/2500 都市計画基本図使用)

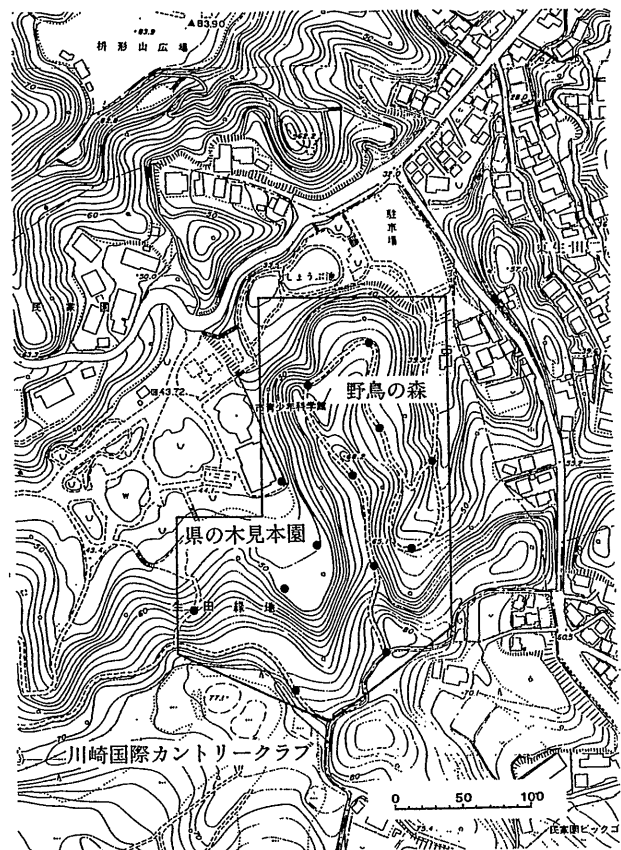


図-1 調査地

口駐車場の整備工事が行われていた。

調査地域は梶山(1980)及び地形図・空中写真によると、戦後は一部に植栽が行われているが、科学館建設(1971)後は人手が大きく加わったことはない。近隣のマキ材調達などにも利用されていた林と推測される。

また、調査地域の含まれる生田緑地では、月1回(通常第2火曜日)ラインセンサスを行っており現在31科85種の野鳥を観察している。

## III 調査方法

林道上の各調査地点に調査員を配置し、さえぎった地

\* 1 川崎市青少年科学館

\* 2 かわさき自然調査団

点（ソングポスト）、♂同士の争い行動、移動などを中心に観察し、時刻（分単位）とともに地図に記録した。調査開始前に各自の時計を合わせ、調査地点の割り振りを行った。各調査地点の距離はおおよそ50mを目安に、地形を考慮して決めた。ただし、なわばり確認や調査人数の制約のため、調査地点を若干変更した日もある。調査人数は平均9.3人、時間は8:30～10:00に行った。同時にシジュウカラ以外の野鳥についても確認記録をとった。調査日・天候・気温は表1のとおりである。

表1 調査日と天候・気温(9h)  
(川崎市青少年科学館気象観測参考)

年月日	天候	気温(°C)
1995.4.2	曇り	14.5
4.22	曇り	17.0
4.23	曇り/小雨	22.5
1996.4.19	曇り	13.0
4.26	快晴	14.5
4.30	曇り	19.5
1997.4.15	曇り	11.5
4.16	曇り	9.0
4.17	晴れ	8.0
1998.4.1	曇り	8.7
4.14	曇り	22.2
4.16	曇り	13.3
1999.4.14	晴れ	11.0
4.15	晴れ	9.5
4.16	曇り	12.0
4.20	晴れ	15.0

表-1

#### IV 調査結果

確認したソングポストや争いの行動は図2～図6に、それらから推定したテリトリーを図7～図10に推定図として示した。なわばり境界線は、原則として2個体の中間点を便宜上2個体の境界とした。また本来ならば多角形として示さなければならないが、ここでは曲線で示し、いびつな曲線になる所は調査員に再確認してもらい、修正を行った。

ただし、1995年は3日間の調査日のうち2日、天気が悪くまた鳴き合いも少なかったため、なわばりの推定図を示すことが出来ず除外した。

以上の結果を踏まえて、表2に年次別にテリトリーの数を表3に平均ha等を示した。なお面積を計算するにあたり、社団法人 日本林業技術協会発行の日林協式点格子板を使用した。

4年間の調査結果を見ると、年によって若干の違いはあるものの、あまり大きな変動は見られず、調査地域に完全に含まれるテリトリーは3個か5個である事がわかる。ただし一部含むものも数えると10個～13個となっている。また面積に関しても、最小のものが0.51ha、最大が1.17ha。平均面積が0.68～0.77 haという結果になっている。

シジュウカラのテリトリーの広さについては環境によりかなりの差があることは周知の事であり、年によっても変動があり、また、さえずりを確認しても、果たしてその個体が番の雄なのか独身の雄なのか判別が難しいという点もあるが、約4.3 haの調査地域に10～13羽の雄のシジュウカラが生息しているものと思われる。

木下ほか(1994)では、面積が0.33～0.67 ha (平均0.46 ha)、調査地域に全部入るテリトリーは5個、1部入るものは4個ある。

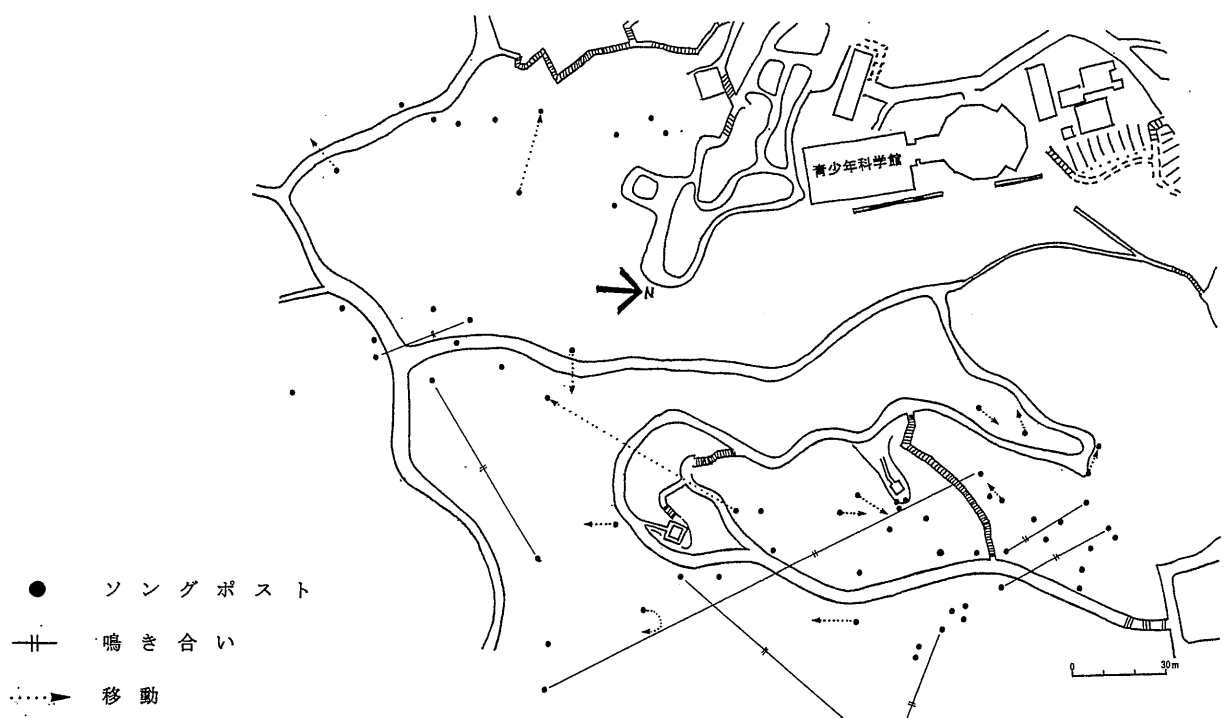


図-2 シジュウカラのソングポスト図(1995年)

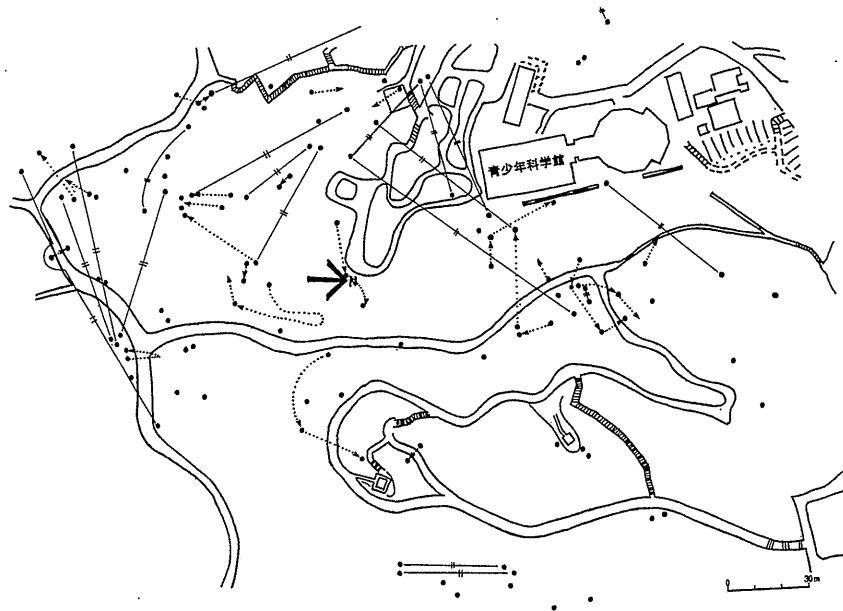


図-3 シジュウカラのソングポスト図 (1996年)

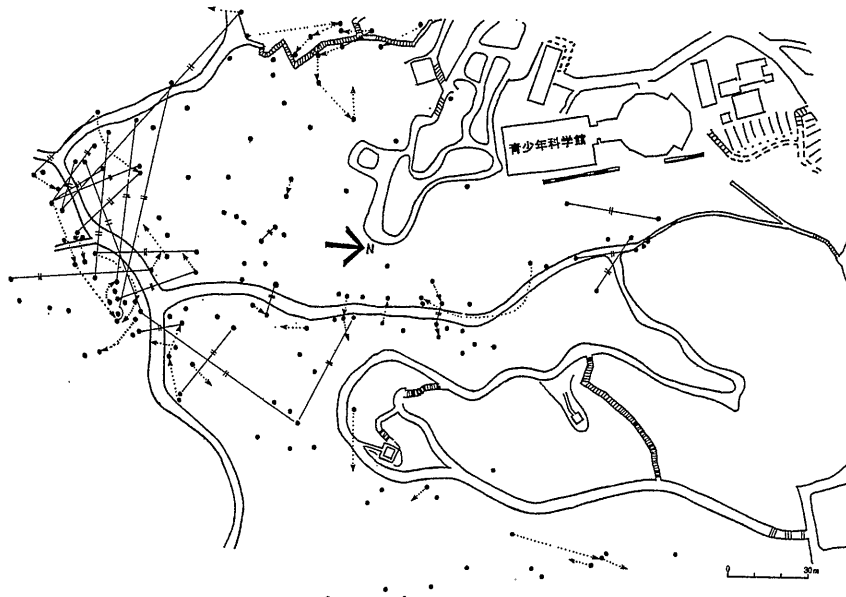


図-4 シジュウカラのソングポスト図 (1997年)

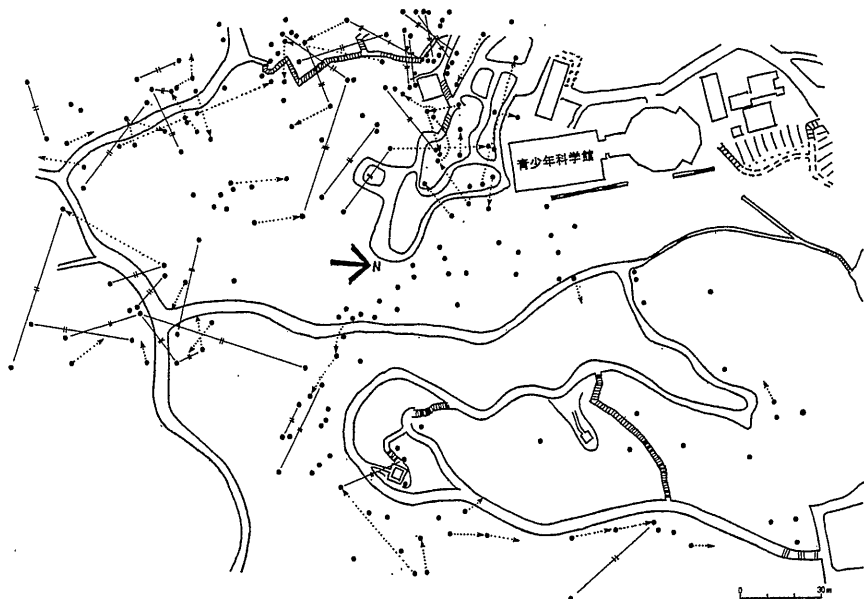


図-5 シジュウカラのソングポスト図 (1998年)

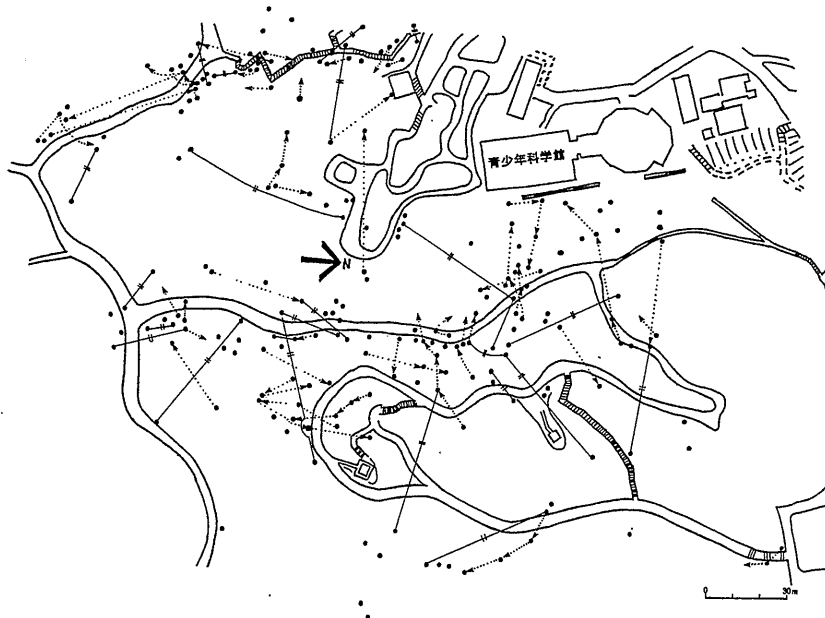


図-6 シジュウカラのソングポスト図 (1999年)

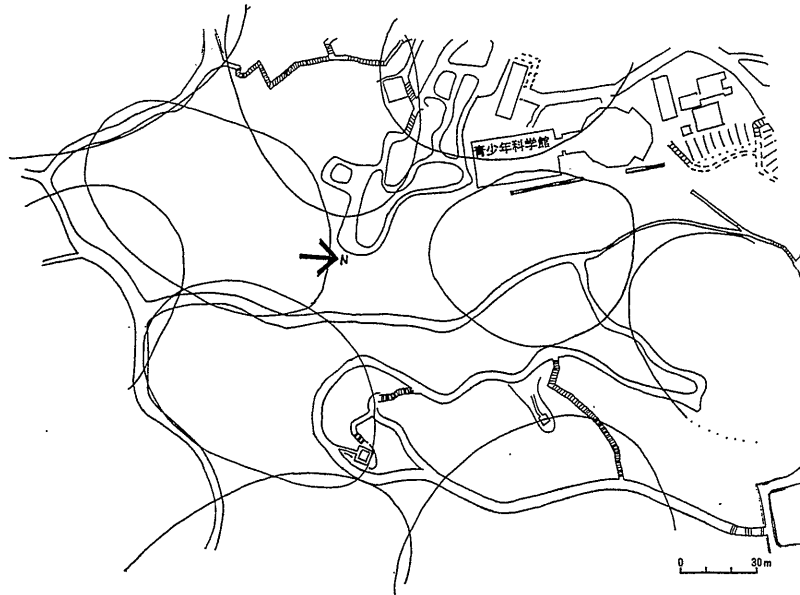


図-7 シジュウカラの繁殖期のテリトリー推定図 (1996年)

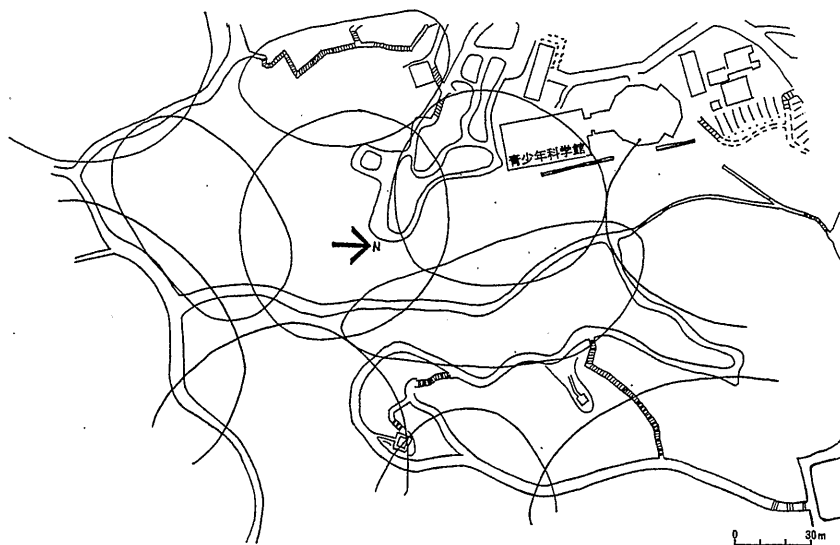


図-8 シジュウカラの繁殖期のテリトリー推定図 (1997年)

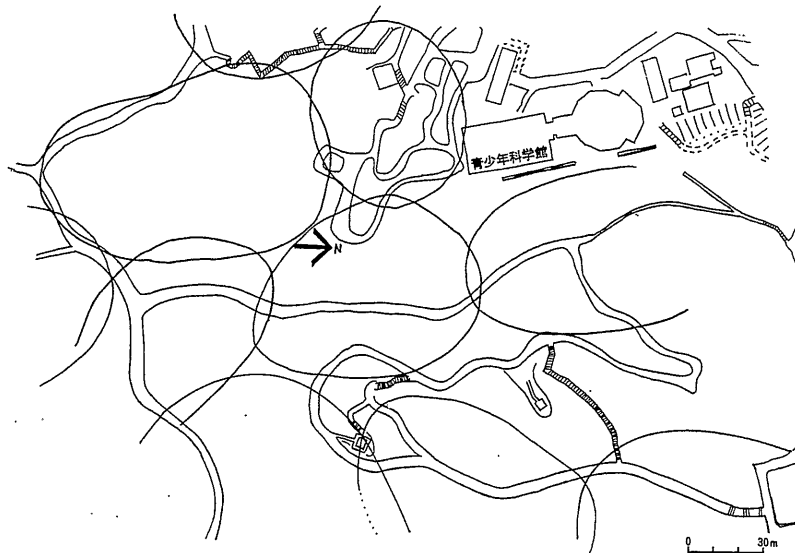


図-9 シジュウカラの繁殖期のテリトリー推定図 (1998年)



図-10 シジュウカラの繁殖期のテリトリー推定図 (1999年)

比較してみると、1個体当たりの平均テリトリー面積が広がり、その最大面積は1.17 haと木下より0.5 ha広くなり、若干ではあるが一部入るものも含めればその数も増えている傾向が見られるが、全体的に見て大きな違いは無いと考えられる。

周辺地域の工事等で影響があるかと考えられていたが、この調査結果から、生田緑地内における本調査地がシジュウカラの繁殖地として比較的安定した環境を保っている事が考えられる。

また、調査方法・植生・面積等が異なるため比較はむずかしいが、参考までに見ると、東京都目黒区国立科学博物館附属自然教育園の調査で、桜井・安岡(1972)は自然教育園(約20 ha)のテリトリー数を8年間で、面積が平均0.8 ha~平均1.4 haに変化し、テリトリーが園内に全部入っている数を13~16としている。

そして八木(1981)では面積が平均約0.378 ha、テリトリー数が21個と報告されている。

表2

	調査地域に完全に入る	調査地域に一部含まれる
	テリトリー数	テリトリー数
1996年	3	7
1997年	5	6
1998年	3	7
1999年	5	8

表-2

表3

	平均ha	最小・最大ha
1996年	0.77	0.63~0.87
1997年	0.68	0.52~0.85
1998年	0.74	0.51~1.01
1999年	0.77	0.54~1.17

表-3

今後の課題としては、同じ調査域での継続調査と調査域の拡大、営巣場所の確認などを行うと共に調査回数を増やし、産卵前期に調査回数を増やしテリトリーの変動が起こる前に必要な記録をとる事があげられる。今後とも調査を行う事で、調査地域のテリトリーの変動と、そして将来的に生田緑地全体のシジュウカラの繁殖個体数を推測してみたい。

## 摘 要

- ・1995年から1999年の5年間、川崎市多摩区の生田緑地でシジュウカラの繁殖期のテリトリー調査を行った。
- ・調査地域約4.3haの中に全部入るテリトリーは3個ないし5個、また一部入るものは10～13個と年により若干の変化が見られるが、大きな変化は見られず、調査地域がシジュウカラの繁殖地として比較的安定した環境にあるものと考えられる。
- ・テリトリーの面積は年によって違うが、平均0.68～0.77haと推算した。
- ・木下ほか(1994)の結果と比較をした。

## 文 献

- 梶山三千男・小室富(1980)川崎市生田緑地の現存植生. 川崎市文化財収録(16):1-37.川崎市教育委員会.
- 木下あけみ・野鳥班(1994)川崎市生田緑地におけるシジュウカラの繁殖期テリトリーについて(予報). 川崎市自然環境調査報告:189-194.川崎市教育委員会.
- 桜井信夫・岡安祐司(1972)自然教育園におけるシジュウカラの繁殖個体数の変動について(中間報告).自然教育園報告(3):17-21.
- 高橋小百合・野鳥班(1998)川崎市生田緑地の野鳥とその季節的消長Ⅱ. 川崎市青少年科学館 紀要(10):41-57. 川崎市教育委員会.
- 八木和主男・千羽晋示(1981)自然教育園におけるシジュウカラの繁殖個体数について(1976年度).自然教育園報告(12):115-119.

野鳥班:

安藤眞佐子・石井一与・石渡康子・伊藤ミサヨ・金井キミ子・亀岡千佳子・佐野悦子・柴田日出子・高野淳子・滝孔一郎・田島幹朗・田中スミ子・中島久美子・成田和子・橋本志津子・早坂文子・東 弘一・平川恵美子・藤沢正一・藤森貞晴・松下優子・三谷頼吾・水田茂子・水山栄子・安井やす子・渡辺キヌ

佐久間雅彦(川崎市青少年科学館職員)

- 担当職員:・木下あけみ(1996年4月まで)  
(現)高津市民館橋分館職員  
・高橋小百合(1996年5月以降)